

Botchan Chapter 6 (Natsume Sōseki)

の だいきら 野だは大嫌いだ。こんな やつ たくあんいし 奴は沢庵石をつけて 海 の 底 へ 沈めちまう 方が 日本 の ためだ。赤シ ャツ は 声 が 氣 に 食わ ない。あれは 持前 の 声 を わざと 氣取 っ て あんな 優 しい よう に 見 せ て る ん だ ろ う。いくら 氣取 っ た っ て、あ の 面 じゃ 駄 目 だ。惚 れ る も の が あ っ た っ て マド ン ナ ぐ ら い な も の だ。し かし 教 頭 だ け に 野 だ よ り む ず かし い 事 を 云 う。う ち へ 帰 っ て、あ い つ の 申 し 条 を 考 へ て み る と 一 応 も っ と も の よ う で も あ る。は っ き り と し た 事 は 云 わ ない か ら、見 当 が つ き か ね る が、何 で も 山 嵐 が よ く ない 奴 だ か ら 用 心 し ろ と 云 う の ら し い。そ れ なら そ う と は っ き り 断 言 す る が い い、男 ら し く も ない。そ う し て、そ ン な 悪 る い 教 師 なら、早 く 免 職 さ し た ら よ か ろ う。教 頭 なら 文 学 士 の 癖 に 意 氣 地 の ない も ン だ。蔭 口 を き く の で さ え、公 然 と 名 前 が 云 え ない くら い な 男 だ か ら、弱 虫 に 極 ま っ て る。弱 虫 は 親 切 な も の だ か ら、あ の 赤 シ ャ ツ も 女 の よ う な 親 切 も の な ん だ ろ う。親 切 は 親 切、声 は 声 だ か ら、声 が 氣 に 入 ら ない っ て、親 切 を 無 に し ち ゃ 筋 が 違 う。そ れ に し て も 世 の 中 は 不 思 議 な も の だ、虫 の 好 か ない 奴 が 親 切 で、氣 の あ っ た 友 達 が 悪 漢 だ な ん て、人 を 馬 鹿 に し て い る。大 方 田 舎 だ か ら 万 事 東 京 の さ か に 行 く ン だ ろ う。物 騒 な 所 だ。今 に 火 事 が 氷 っ て、石 が 豆 腐 に な る か も 知 れ ない。し かし、あ の 山 嵐 が 生 徒 を 煽 動 す る な ん て、い た ず ら を し そ う も ない が な。一 番 人 望 の あ る 教 師 だ と 云 う か ら、や ろ う と 思 っ た ら 大 抵 の 事 は 出 来 る か も 知 れ ない が、—— 第 一 そ ン な 廻 り く ど い 事 を し ない で も、じ か に お れ を 捕 ま え て 喧 嘩 を 吹 き 懸 け り や 手 数 が 省 け る 訳 だ。お れ が 邪 魔 に な る なら、実 は こ れ こ れ だ、邪 魔 だ か ら 辞 職 し て くれ と 云 や、よ さ そ う な も ン だ。物 は 相 談 ず く で ど う で も な る。向 う の 云 い 条 が も っ と も なら、明 日 に で も 辞 職 し て や る。こ こ ば かり 米 が 出 来 る 訳 で も あ る ま い。ど こ の 果 へ 行 っ た っ て、の た れ 死 は し ない つ も り だ。山 嵐 も よ っ ぽ ど 話 せ ない 奴 だ な。

こ こ へ 来 た 時 第 一 番 に 氷 水 を 奢 っ た の は 山 嵐 だ。そ ン な 裏 表 の あ る 奴 か ら、氷 水 で も 奢 っ て も ら っ ち ゃ、お れ の 顔 に 関 わ る。お れ は た っ た 一 杯 し か 飲 ま な か っ た か ら 一 銭 五 厘 し か 払 わ し ち ゃ ない。し かし 一 銭 だ ろ う が 五 厘 だ ろ う が、詐 欺 師 の 恩 に な っ て は、死 ぬ ま で 心 持 ち が よ く ない。あ し た の 学 校 へ 行 っ た ら、一 銭 五 厘 返 し て お こ う。お れ は 清 か ら 三 円 借 り て い る。そ の 三 円 は 五 年 経 っ た 今 日 ま で ま だ 返 さ ない。返 せ ない ン じ ゃ ない。返 さ ない ン だ。清 は 今 に 返 す だ ろ う な ど と、か り そ め に も お れ の 懐 中 を あ て に し て は い ない。お れ も 今 に 返 そ う

などと他人がましい義理立てはしないつもりだ。こっちがこんな心配をすればするほど清の
心こころを疑うたぐるようなもので、清の美うつくしい心にけちつを付けると同じ事になる。返さないのは清
を踏ふみつけるのじゃない、清をおれの片破かたわれと思おもうからだ。清と山嵐とはもとより比べ物くらものにな
らないが、たとい氷水だろうが、甘茶あまちゃだろうが、他人から恵めぐみを受けて、だまっているのは向
うをひとかどの人間にんげんと見立てて、その人間に対する厚意たいこういの所作しよさだ。割前わりまえを出せばそれだけの
事すで済むところを、心のうちで難有ありがたいと恩おんに着きるのは銭金ぜにかねで買かえる返礼はんれいじゃない。無位無冠むいむかん
でも一人前いちにんまえの独立どくりつした人間だ。独立した人間が頭あたまを下さげるのは百万ひやくまんりょう両りょうより尊たつといお礼れいと
思おもわなければならない。

おれはこれでも山嵐に一銭五厘ふんぼつ奮發きさせて、百万両より尊きとい返礼きをした気きでいる。山嵐は難
有うらいと思まわってしかるべきだ。それに裏うらへ廻まわって卑劣ひれつな振舞ふるまいをすとは怪けしからん野郎やろうだ。あし
た行かって一銭五厘返かしてしまえば借けんかりも貸かしもない。そうしておいて喧嘩けんかをしてやろう。

おれはここまで考かんがえたら、眠ねむくなつたからぐうぐう寝ねてしまった。あくる日は思ひう仔細おもがある
から、例刻れいこくより早はま目めに出しゅっこう校やまして山嵐あらしを待まち受うけた。ところがなかなか出でて来こない。う
らなりがかんがく出せんせいて来る。漢学のの先生あかが出て来る。しまいには赤あかシャツまで出で
来たが山嵐つくえの机うえの上はくぼくは白墨いっぼんたてが一本ね堅かんせいに寝かんでいるだけで閑静ひかえじよなものだ。おれは、控所ひかえじよへは
いるや否いなや返かえそうと思いって、うちを出でる時ときから、湯銭ゆせんのように手ての平ひらへ入いれて一銭五厘いっせんごりん、
学校がっこうまで握にぎって来きた。おれは膏あぶらっ手てだから、開あけてみると一銭五厘あせが汗あせをかいている。汗あせ
をかいてる銭ぜにを返なんしちや、山嵐いが何なんと云いうだろうと思おつたから、机おの上おへ置おいてふうふう吹ふ
てまた握きつた。ところへ赤きのうシャツが来しつけいて昨日めいわくは失敬めいわく、迷惑めいわくでしたらうと云いつたから、迷惑めいわくじゃ
ありません、お蔭かげで腹はらが減へりましたと答こたえた。すると赤あせシャツは山嵐あせの机あせの上あせへ肱ひじを突ついて、
あの盤ばん台だ面めんをおれの鼻はなの側面そくめんへ持もって来きたから、何なにをするかと思きつたら、君きみ昨日かえ返かえりがけに
船ふねの中なかで話はなした事ことは、秘密ひみつにしてくれたまえ。まだ誰だれにも話だれしやしませんと云おんなつた。女おんな
のような声こえを出だすだけに心配しんぱい性せいな男おとこと見みえる。話おとこさない事はたしかである。しかしこれから
話おとこそうと云おとこう心こころ持もちで、すでに一銭五厘手よういの平よういに用意よういしているくらいだから、ここで赤あせシャツ
から口留くちどめをされちや、ちと困こまる。赤あせシャツも赤あせシャツだ。山嵐あせと名なを指ささないにしろ、あれ
ほど推察すいさつの出来できる謎なぞをかけておきながら、今いまさらその謎なぞを解といてちや迷惑めいわくだとは教頭きやうとうとも思
えぬ無責任むせきにんだ。元来がんらいならおれが山嵐せんそうと戦せんそうをはじめて鎬しのぎを削けずってる真中まんなかへ出でて堂々どうどうとおれ

の肩を持つべきだ。それでこそ一校の教頭で、赤シャツを着ている主意も立つというものだ。

おれは教頭に向って、まだ誰にも話さないが、これから山嵐と談判するつもりだと云ったら、赤シャツは大いに狼狽して、君そんな無法な事をしちゃ困る。僕は堀田君の事について、別段君に何も明言した覚えはないんだから——君がもしここで乱暴を働いてくれると、僕は非常に迷惑する。君は学校に騒動を起すつもりで来たんじゃないかと妙に常識をはずれた質問をするから、当たり前です、月給をもらったり、騒動を起したりしちゃ、学校の方でも困るでしょうと云った。すると赤シャツはそれじゃ昨日の事は君の参考だけにとめて、口外してくれるなど汗をかいて依頼に及ぶから、よろしい、僕も困るんだが、そんなにあなたが迷惑ならよしましよと受け合った。君大丈夫かいと赤シャツは念を押した。どこまで女らしいんだか奥行がわからない。文学士なんて、みんなあんな連中ならつまらんものだ。辻褄の合わない、論理に欠けた注文をして恬然としている。しかもこのおれを疑ぐってる。憚りながら男だ。受け合った事を裏へ廻って反古にするようなさもない見はもってるもんか。

ところへ両隣の机の所有主も出校したんで、赤シャツは早々自分の席へ帰って行った。赤シャツは歩き方から気取ってる。部屋の中を往来するのでも、音を立てないように靴の底をそっと落とす。音を立てないであるくのが自慢になるもんだとは、この時から始めて知った。泥棒の稽古じゃあるまいし、当たり前にするがいい。やがて始業の喇叭がなった。山嵐はとうとう出て来ない。仕方がないから、一銭五厘を机の上へ置いて教場へ出掛けた。

授業の都合で一時間目は少し後れて、控所へ帰ったら、ほかの教師はみんな机を控えて話をしている。山嵐もいつの間にか来ている。欠勤だと思ったら遅刻したんだ。おれの顔を見るや否や今日は君のお蔭で遅刻したんだ。罰金を出したまえと云った。おれは机の上にあった一銭五厘を出して、これをやるから取っておけ。先達て通町で飲んだ氷水の代だと山嵐の前へ置くと、何を云ってるんだと笑いかけたが、おれが存外真面目でいるので、つまらない冗談をするなど銭をおれの机の上に掃き返した。おや山嵐の癖にどこまでも奢る気だな。

「冗談じゃない本当だ。おれは君に氷水を奢られる因縁がないから、出すんだ。取らない法があるか」

「そんなに一銭五厘が気になるなら取ってもいいが、なぜ思い出したように、今時分返すんだ」

「今時分でも、いつ時分でも、返すんだ。奢られるのが、いやだから返すんだ」

山嵐は冷然とおれの顔を見てふんと云った。赤シャツの依頼がなければ、ここで山嵐の卑劣をあばいて大喧嘩をしてやるんだが、口外しないと受け合ったんだから動きがとれない。人がこんなに真赤になってるのにふんという理窟があるものか。

「氷水の代は受け取るから、下宿は出てくれ」

「一銭五厘受け取ればそれでいい。下宿を出ようが出まいがおれの勝手だ」

「ところが勝手に、昨日、あすこの亭主が来て君に出てもらいたいと云うから、その訳を聞いたなら亭主の云うのはもつともだ。それでももう一応たしかめるつもりで今朝あすこへ寄って詳しい話を聞いてきたんだ」

おれには山嵐の云う事が何の意味だか分らない。

「亭主が君に何を話したんだか、おれが知ってるもんか。そう自分だけで極めたって仕様があるか。訳があるなら、訳を話すのが順だ。てんから亭主の云う方がもつともだなんて失敬千々な事を云うな」

「うん、そんなら云ってやろう。君は乱暴であの下宿で持て余まされているんだ。いくら下宿の女房だって、下女たあ違うぜ。足を出して拭かせるなんて、威張り過ぎるさ」

「おれが、いつ下宿の女房に足を拭かせた」

「拭かせたかどうか知らないが、とにかく向うじゃ、君に困ってるんだ。下宿料の十円や十五円は懸物を一幅売りゃ、すぐ浮いてくるって云ってたぜ」

「利いた風な事をぬかす野郎だ。そんなら、なぜ置いた」

「なぜ置いたか、僕は知らん、置くことは置いたんだが、いやになったんだから、出ると云うんだろう。君出てやれ」

い事においては大抵な人には負けない。あなたは眼が大きいから役者になるときと似合いますと清がよく云ったくらいだ。

もう大抵お揃いでしょうかと校長が云うと、書記の川村と云うのが一つ二つと頭数を勘定してみる。一人足りない。一人不足ですがと考えていたが、これは足りないはずだ。唐茄子のうらなり君が来ていない。おれとうらなり君とはどう云う宿世の因縁か知らないが、この人の顔を見て以来どうしても忘れられない。控所へくれば、すぐ、うらなり君が眼に付く、途中をあるいていても、うらなり先生の様子が心に浮ぶ。温泉へ行くと、うらなり君が時々蒼い顔をして湯壺のなかに膨れている。挨拶をするとへえと恐縮して頭を下げるから気の毒になる。学校へ出てうらなり君ほど大人しい人は居ない。めったに笑った事もないが、余計な口をきいた事もない。おれは君子という言葉を書物の上で知ってるが、これは字引にあるばかりで、生きてるものではないと思ってたが、うらなり君に逢ってから始めて、やっぱり正体のある文字だと感心したくらいだ。

このくらい関係の深い人の事だから、会議室へはいるや否や、うらなり君の居ないのは、すぐ気がついた。実を云うと、この男の次へでも坐わろうかと、ひそかに目標にして来たくらいだ。校長はもうやがて見えるでしょうと、自分の前にある紫の袱紗包をほどいて、蒟蒻版のような者を読んでいる。赤シャツは琥珀のパイプを絹ハンケチで磨き始めた。この男はこれが道楽である。赤シャツ相当のところだろう。ほかの連中は隣り同志で何だかささやあ私語き合っている。手持無沙汰なのは鉛筆の尻に着いている、護謨の頭でテーブルの上へしきりに何か書いている。野だは時々山嵐に話しかけるが、山嵐は一向応じない。ただうんとかああと云うばかりで、時々怖い眼をして、おれの方を見る。おれも負けずに睨め返す。

ところへ待ちかねた、うらなり君が気の毒そうにはいつて来て少々用事がありまして、遅刻致しましたと慇懃に狸に挨拶をした。では会議を開きますと狸はまず書記の川村君に蒟蒻版を配布させる。見ると最初が処分の件、次が生徒取締の件、その他二三ヶ条である。狸は例の通りもったいぶって、教育の生霊という見えでこんな意味の事を述べた。「学校の職員や生徒に過失のあるのは、みんな自分の寡徳の致すところで、何か事件がある度に、自分はよくこれで校長が勤まるとひそかに慚愧の念に堪えんが、不幸にして今回もまたかかる騒動を引き起したのは、深く諸君に向って謝罪しなければならん。しかしひとたび

おこ いじょう しかた じじつ しょうち
起った以上は仕方がない、どうにか処分をせんければならん、事實はずでに諸君のご承知の
とお ぜんごさく ふくぞう こと さんこう の くだ
通りであるからして、善後策について腹蔵のない事を参考のためにお述べ下さい」

おれは校長の言葉ことばを聞いて、なるほど校長だの狸だのと云うものは、えらい事を云うもんだと
かんしん
感心した。こう校長が何もかも責任せきにんを受けて、自分の咎とがだとか、不徳ふとくだとか云うくらいな
ら、生徒を処分するのは、やめにして、自分から先へ免職さき めんしょくになったら、よさそうなもんだ。
そうすればこんな面倒めんどうな会議ひつようなんぞを開く必要もなくなる訳だ。第一常識だいいちじょうしきから云っても分
ってる。おれが大人おとなしく宿直しゅくちよくをする。生徒らんぼうが乱暴らんぼうをする。わるいのは校長でもなけりや、
おれでもない、生徒きまだけに極きまってる。もし山嵐やまあらしが煽動せんどうしたとすれば、生徒と山嵐たいじを退治たいじれば
それでたくさんだ。人の尻ひと しりを自分で背負しよい込んで、おれの尻こだ、おれの尻ふだと吹き散ちらかす奴やつ
が、どこの国にあるもんか、狸でなくっちゃ出来る芸当で き げいとうじゃない。彼はこんな条理かれ じょうりに適かなわな
い議論ぎろんを吐はいて、得意とくいげ気に一同いちどうを見廻みまわした。ところが誰も口を開くものがない。博物はくぶつの教師きょうし
は第一教場きょうじょうの屋根やねに鳥からすがとまっているのを眺ながめている。漢学かんがくの先生せんせいは蒟蒻版たを畳たたんだり、
の 延のばしたりしてる。山嵐かおはまだおれの顔かおをにらめている。会議かいぎと云うものが、こんな馬鹿ばか気げた
ものなら、欠席けっせきして昼寝ひるねでもしている方がました。

おれは、じれったくなつたから、一番大いちばんいに弁おおじてやろうと思おもって、半分尻はんぶんしりをあげかけた
ら、赤あかシャツが何か云なにい出したから、やめにした。見るとパイプをしまつて、縞しまのある絹きぬハン
ケチで顔かおをふきながら、何か云なんっている。あの手巾はんけちはきつとマドンナから巻まき上げたに相違そういな
い。男おとこは白しろい麻あさを使うもんだ。「私も寄宿生わたし きしゅくせいの乱暴らんぼうを聞いてはなはだ教頭きょうとうとして
不行届ふゆきとどきであり、かつ平常へいじょうの徳化とつかが少年しょうねんに及およばなかつたのを深く慚ふかずるのであります。でこ
う云ことう事は、何か陥欠かんけつがあると起おこるもので、事件じけんその物ものを見ると何なんだか生徒せいとだけがわるいよ
うであるが、その真相しんそうを極きわめると責任せきにんはかえつて学校がっこうにあるかも知れない。だから
表面ひょうめんじょうにあらわれたところだけで嚴重げんじゅうな制裁せいさいを加くわえるのは、かえつて未来みらいのためによく
ないかとも思しわれます。かつ少年血気しょうねんけつきのものであるから活気かつきがあふれて、善悪ぜんあくの考かんがえはな
く、半ば無意識なか むいしきにこんな悪戯いたづらをやる事はないとも限かぎらん。でもとより処分法しょぶんほうは校長こうちょうのお考
えにある事だから、私の容喙ようかいする限りかぎではないが、どうかその辺へんをご斟酌しんしゃくになって、なるべ
く寛大かんだいなお取計とりはからいを願ねがひたいと思います」

なるほど^{たぬき} 狸が狸なら、赤シャツも赤シャツだ。生徒があばれるのは、生徒がわるいんじゃない
教師が悪^{きょうし}るいんだと公言^わしている。氣狂^{こうげん}が人の頭^{きちがい}を撲^{ひと}り付け^{あたま}るのは、なぐられた人がわる
いから、氣狂^{ありがた}がなぐるんだそうだ。活氣^{しあわ}にみちて困^{こま}るなら運動場^{うんどうじょう}へ出て
相撲^{すもう}でも取る^とがいい、半ば無意識^{とこ}に床の中^{なか}へバツタ^いを入れられてたまる^いものか。この様子^{ようす}じゃ
寝頭^{ねくび}をかか^{ほうめん}れても、半ば無意識^{ほうめん}だって放免^{ほうめん}するつもりだろう。

おれはこう^{かんが}考^なえて何か云^いおうかなと考^{ひと}えてみたが、云^{おど}うなら人^{ひと}を驚^{おど}ろかすように滔々^{とうとう}と述べ
たてなくっちゃつまらない、おれの癖^{くせ}として、腹^{はら}が立^たったときに口^{くち}をきくと、二言^{ふたこと}か三言^{みこと}で
必^{かなら}ず行き塞^いつてしまう。狸^{たぬき}でも赤シャツ^{あか}でも人物^{じんぶつ}から云^いうと、おれよりも下等^{かとう}だが、弁舌^{べんぜつ}
はなかなか達者^{たっしゃ}だから、まずい事^{こと}を喋^{しゃべ}舌^あげて揚^{あげ}足^{あし}を取^とられちゃ面白^{おもしろ}くない。ちょっと腹案^{ふくあん}を
作^{つく}ってみようと、胸^{むね}のなかで文^{ぶん}章^{しょう}を作^まってる。すると前^{まえ}に居^いた野^のだが突^{とつ}然^{ぜん}起^き立^{りつ}したには驚^{おど}ろ
いた。野^{いけん}だの癖^のに意見^{なまいき}を述^{れい}べるなんて生意^{ちやう}気^{じつ}だ。野^{こんかい}だは例^ののへらへら調^で「実^{じつ}に今^{こん}回^{かい}のバツ
夕^{じけんおよ}事件^{とっかん}及び咄^{われわれ}喊^わ事件^{ころ}は吾^{しよくいん}々^{わが}心^{こころ}ある職^{わが}員^{こうしやうらい}をして、ひそかに吾^{ぜん}校^と将^{きぐ}来^{ねん}の前途^{ぜん}に危^き惧^ぐの念^{ねん}を
抱^{いだ}かしむるに足^たる珍^{ちん}事^じでありまして、吾^{さいふる}々^み職^み員^{ずか}たるものはこの際^{かえ}奮^{ぜん}って自^{ぜん}ら省^{こう}りみ^{こう}て、全校^{ぜんこう}
の風紀^{ふうき}を振^{しん}粛^{しゆく}しなければなりません。それでた^{いま}だ今^{こうちやう}校^{きやうとう}長^と及^{きやうとう}び教^{きやうとう}頭^とのお述^{せつ}べにな^{せつ}ったお説^{せつ}
は、実^{こうけい}に肯^{あた}綮^がに中^がった割^が切^いな考^{かんが}えで私^{わたし}は徹^{てつ}頭^{とう}徹^{てつ}尾^び賛^{さん}成^{せい}致^{いた}します。どうかなるべく寛^{かん}大^{だい}
のご処^{しよぶん}分^{ぶん}を仰^{あお}ぎたいと思^{おも}います」と云^いった。野^{ことば}だの云^いう事^いは言^い語^みはあるが意^{かんご}味^ごがない、漢^{かん}語^ごを
のべ^{ちんれつ}つに陳^わ列^わするぎ^わりで訳^わが分^わらない。分^わつたのは徹^わ頭^わ徹^わ尾^わ賛^わ成^わ致^わしますと云^わう言葉^わだけ
だ。

おれは野^のだの云^いう意^い味^みは分^{わか}らないけれども、何^{なん}だか非^ひ常^{じやう}に腹^{はら}が立^たったから、腹^{ふくあん}案^{あん}も出^で来^きない
うち^たに起^あち上^あがってしま^{わたし}った。「私^{わたし}は徹^{てつ}頭^{とう}徹^{てつ}尾^び反^{はん}対^{たい}です.....」と云^いったがあとが急^{きゆう}に出^で
来^きない。「.....そんな頓^{とん}珍^{ちん}漢^{かん}な、処^{しよぶん}分^{ぶん}は大^{だい}嫌^{きら}いです」とつ^{しよくいん}けたら、職^い員^{ちやう}が一同^い笑^{わら}い出^だ
た。「一^い体^{たい}生^{せい}徒^とが全^{ぜん}然^{ぜん}悪^わるい^わです。どうして^{あや}も詫^くまらせなく^くちや、癖^{くせ}にな^{たい}ります。退^{たい}校^{こう}さ
しても構^{かま}いません。.....何^{なん}だ失^{しつ}敬^{けい}な、新^{あた}しく来^きた教^{きやうし}師^おだと思^{おも}って.....」と云^いって着^{ちやく}席^{せき}し
た。すると右^{みぎ}隣^{どな}りに居^いる博^{はく}物^{ぶつ}が「生^{こと}徒^とがわるい事^いも、わるい^{げんじゆう}が、あまり^{ぼつ}厳^{げん}重^{じゆう}な罰^{ばつ}などをす
るとかえ^{はんどう}って反^{おこ}動^こを起^きしてい^{きやうとう}けな^といでし^{とお}ょう。や^{かん}っぱり^{ほう}教^{きやうとう}頭^とのお^とっし^{かん}や^{ほう}る通^{ほう}り、寛^{かん}な方^{ほう}に
賛^{さん}成^{せい}しま^{さん}す」と弱^{よわ}い事^{ひだり}を云^{どなり}った。左^{ひだり}隣^{どなり}の漢^{かん}学^{がく}は穩^{おん}便^{びん}説^{せつ}に賛^れ成^{きし}と云^いった。歴^{れき}史^しも教^{きやうし}頭^おと
同^{どう}説^{せつ}だと云^いった。忌^{いま}々^ましい、大^{たい}抵^{てい}のものは赤^{あか}シャツ^{とう}党^{とう}だ。こんな連^{れん}中^{ちゆう}が寄^より合^あって学^が校^{こう}を
立^たててい^せりや世^せ話^わはない。おれは生^{じしよく}徒^とをあ^{ふた}や^{ふた}ま^{ふた}らせるか、辞^じ職^{じよく}するか二^{ふた}つ^{ふた}のうち一^{ひと}つ^{ひと}に極^きめて

るんだから、もし赤シャツが勝ちを制したら、早速うちへ帰って荷作りをする覚悟でいた。どうせ、こんな手合を弁口で屈伏させる手際はなし、させたところでいつまでご交際を願うのは、こっちでご免だ。学校に居ないとすればどうなったって構うもんか。また何か云うと笑うに違いない。だれが云うもんかと澄していた。

すると今までだまって聞いていた山嵐が奮然として、起ち上がった。野郎また赤シャツ賛成の意を表するな、どうせ、貴様とは喧嘩だ、勝手にしろと見ていると山嵐は硝子窓を振わせるような声で「私は教頭及びその他諸君のお説には全然不同意であります。というものはこの事件はどの点から見ても、五十名の寄宿生が新来の教師某氏を軽侮してこれを翻弄しようとした所為とより外には認められんのであります。教頭はその原因を教師の人物いかに求めになるようでありますが失礼ながらそれは失言かと思ひます。某氏が宿直にあたられたのは着後早々の事で、まだ生徒に接せられてから二十日に満たぬ頃であります。この短い二十日間において生徒は君の学問人物を評価し得る余地がないのであります。軽侮されべき至当な理由があつて、軽侮を受けたのなら生徒の行為に斟酌を加える理由もありましょうが、何らの原因もないのに新来の先生を愚弄するような軽薄な生徒を寛宥しては学校の威信に関わる事と思ひます。教育の精神は単に学問を授けるばかりではない、高尚な、正直な、武士的な元気を鼓吹すると同時に、野卑な、軽躁な、暴慢な悪風を掃蕩するにあると思ひます。もし反動が恐しいの、騒動が大きくなるのと姑息な事を云つた日にはこの弊風はいつ矯正出来るか知れませんが、かかる弊風を杜絶するためにこそ吾々はこの学校に職を奉じているので、これを見逃がすくらいなら始めから教師にならん方がいいと思ひます。私は以上の理由で寄宿生一同を厳罰に処する上に、当該教師の面前において公けに謝罪の意を表せしむるのを至当の所置と心得ます」と云いながら、どんと腰を卸した。一同はだまって何にも言わない。赤シャツはまたパイプを拭き始めた。おれは何だか非常に嬉しかった。おれの云おうと思ふところをおれの代りに山嵐がすっかり言ってくれたようなものだ。おれはこう云う単純な人間だから、今までの喧嘩はまるで忘れて、大いに難有いと云う顔をもって、腰を卸した山嵐の方を見たら、山嵐は一向知らん面をしている。

しばらくして山嵐はまた起立した。「ただ今ちょっと失念して言い落しましたから、申し上げます。当夜の宿直員は宿直中外出でて温泉に行かれたようであるが、あれはもつての外のことと考えます。いやしくも自分が一校の留守番を引き受けながら、咎める者のないのを

幸さいわいに、場所ばしょもあろうに温泉にゅうよくなどへ入湯いに行くなどと云うのは大きな失体おおである。生徒しったいは生徒せいととして、この点てんについては校長こうちょうからとくに責任者せきにんしゃにご注意ちゅういあらん事を希望こと きぼうします」

妙みょうな奴やつだ、ほめたと思おもったら、あとからすぐ人ひとの失策しっさくをあばいている。おれは何なんの気きもなく、前まえの宿直しゅくちよくがでし、そんな事しを知しって、そんな習慣しゅうかんだと思おもって、つい温泉にゅうよくまで行いってしまったんだが、なるほどそう云いわれてみると、これはおれが悪わるかった。攻撃こうげきされても仕方しかたがない。そこでおれはまた起たって「私わたしは正ただに宿直しゅくちよく中に温泉にゅうよくに行いきました。これは全まったくわるい。あやまります」と云いって着席ちゃくせきしたら、一同いちどうがまた笑わらい出した。おれが何かなに云いいさえすれば笑わらう。つまらん奴等やつらだ。貴様等きさまらこれほど自分おおよのわるい事ことを公くわけにわるかったと断言だんげん出来るか、出来ないから笑わらうんだろう。

それから校長こうちょうは、もう大抵たいていご意見いけんもないようでありますから、よく考かんがえた上で処分うえしましよと云いった。ついでだからその結果けっかを云いうと、寄宿生きしゅくせいは一週間いしゅうかんの禁足きんそくになった上に、おれの前まえへ出でて謝罪しゃざいをした。謝罪しゃざいをしなければその時とき辞職じしょくして帰かえるところだったがなまじい、おれのいう通りとおになったのでとうとう大變たいへんな事ことになってしまった。それはあとから話はなすが、校長こうちょうはこの時とき会議かいぎの引き続きひ つづだと号ごうしてこんな事ことを云いった。生徒せいとの風儀ふうぎは、教師きょうしの感化かんかで正ただしていなくてはならん、その一着いちちやくしゅ手てとして、教師きょうしはなるべく飲食店いんしょくてんなどに出入しゅつにゅうしない事にしたい。もっとも送別会そうべつかいなどの節せつは特別とくべつであるが、単独たんどくにあまり上じょうとう等ばしょでない場所いへ行くのはよしたい——たとえば蕎麦屋そばやだの、団子屋だんごやだの——と云いいかけたらまた一同いちどうが笑わらった。野のだが山嵐やまあらしを見て天麩羅てんぷらと云いって目くばせをしたが山嵐とは取り合あわなかった。いい気味きびだ。

おれの脳のうがわるいから、狸たぬきの云いうことなんか、よく分わからないが、蕎麦屋そばやや団子屋だんごやへ行いって、中ちゅうがく学がくの教師つとが勤くまらなくっちゃ、おれみたような食く心しんぼう棒とうていにや到底でき出来こないと思おもった。それなら、それでいいから、初手しよてから蕎麦そばと団子だんごの嫌きらいなものと注文ちゅうもんして雇やとうがいい。だんまりで辞令じれいを下さげておいて、蕎麦そばを食たうな、団子だんごを食たうなと罪つみなお布令ふれを出だすのは、おれのよような外ほかに道楽どうらくのないものにとっては大變だげきな打撃あかだ。すると赤あかシャツがまた口くちを出だした。「元来がんらい中ちゅうがく学がくの教師つとなぞは社会しゃかいの上じょうりゅう流りゅうにくらいするものだからして、単たんに物質ぶつしつてき的てきの快楽かいらくばかり求もとめるべきものでない。その方ほうに耽ふけるとつい品性ひんせいにわるい影えい響きょうを及およぼすようになる。しかし人間にんげんだから、何かごらく娯楽いなかがないと、田舎きへ来て狭せまい土地とちでは到底とうてい暮くらせるものではない。それで釣つりに行くとか、文学ぶんがく書しょを読よむとか、または新体詩しんたいしや俳句はいくを作つくるとか、何でも高こう尚しょうな精神せいしんてき的てき娯楽ごらくを求もとめなくってはいけない……」

だまって聞いてると勝手な熱を吹く。沖へ行って肥料を釣ったり、ゴルキが露西亜の文学者
だったり、馴染の芸者が松の木の下に立ったり、古池へ蛙が飛び込んだりするのが精神的娛
楽なら、天麩羅を食って団子を呑み込むのも精神的娯楽だ。そんな下さらない娯楽を授けるよ
り赤シャツの洗濯でもするがいい。あんまり腹が立ったから「マドンナに逢うのも精神的娯楽
ですか」と聞いてやった。すると今度は誰も笑わない。妙な顔をして互に眼と眼を見合せ
ている。赤シャツ自身は苦しうに下を向いた。それ見ろ。利いたろう。ただ気の毒だったの
はうらなり君で、おれが、こう云ったら蒼い顔をますます蒼くした。